



イラン攻撃後の現地スタッフからの声を届ける

イラクレポート

～爆発音におびえる子どもたち～



毎週イラク現地スタッフからの
レポートをSNS、ホームページに
お届けしています。

今回は抜粋してお送りしておりますが、
ぜひホームページもご覧ください。



米国・イスラエルによるイラン攻撃直後から、イラン、イラク国内の親イラン勢力からイラク国内の米軍・米政府施設や一般の地域に日々攻撃が続いています。また、米軍、イスラエル軍による親イラン勢力への攻撃もある状況です。

リーム・アッバス（アルビル事務所／シリア難民）

戦争が始まって以来、私たちは常に恐怖と不安の中で暮らしています。私の家からは、ドローンやミサイルの音がはっきりと聞こえます。私たちは空港の近くに住んでいるため、爆発が起こるたびに家全体が揺れます。時間が経つにつれて、私たち大人はこうした音にある程度慣れてしまいました。

しかし、子どもたちは極度の恐怖の中で暮らしています。特に8歳の娘サービーンは、何か音が聞こえるたびに、「ミサイルが来る！私たちは死んでしまう！」と繰り返し言います。彼女は攻撃が始まった最初の2日間、眠れませんでした。

最近では「もし私たちが殺したいなら、いっそのこと一度で殺してほしい。どうして毎日こんな恐怖の中で生きなければならないの？」

こんなに幼い子どもからこのような言葉を聞くとは思わず、深くショックを受けました。

爆発音が聞こえるたびに、私たちはどこで何が起きたのかを知ろうとニュースを急いで確認しています。

この状況がいつ終わるのか、まったく見通しが立っていません。離れて暮らす家族は私たちのことをとても心配しています。私は一日に7回以上電話を受け「家を離れて安全な場所へ行くように、遠くへ避難するように、そして状況が悪化するかもしれないから食料や水を備蓄するように」と言われます。

父は毎日電話をしてきて、「シリアに来なさい。こちらの方が状況は良いし、ミサイルもない」と言います。家族の心配は十分わかっていますが、私の考えでは安全な場所など、どこにもありません。

神の御心はどこにいても同じだと思うので、今のところ私は自分の家にとどまるつもりです。



リーム(中央)と家族

Dr.ヒワ・ザラル・ジャフ（アルビル事務所）

この記事を書いているのは3月17日、イラン攻撃が始まってまもなく20日です。アルビルでは日常生活が少しずつ変化しています。攻撃の回数や強さは増えていますが、人々はできるだけ普段通りの生活を続けようとしています。

しかし、最も心配なのは子どもたちへの影響です。子どもたちに恐怖を感じさせないよう、家ではニュースを見せないようにしていますが、会話の中から状況を感じ取ってしまいます。先日、息子のムスタファが「戦争が僕たちのところに近づいているの？」と尋ねてきました。夜に大きな音が聞こえると、子どもが怖がらないようにすぐに

気をそらすようにしています。

一番の心配は、子どもたちの身体の安全だけでなく、心への影響です。電力の状況は少し改善しましたが、まだ完全には安定していません。それでも人々はできるだけ普通の生活を守ろうとしています。



Dr.ヒワ(右)と家族

ラワンド・ギャラリー（アルビル事務所）

イスラエルとイランの緊張の高まりを受けて、戦闘自体はクルディスタン地域で直接起きていなかったものの、間接的に困難な状況に直面するだろうと予想していました。そして数週間わたる戦闘の後、その懸念が現実のものとなり始めています。クルディスタン、特にアルビルのドローン攻撃は継続的に行われており、私たちは自宅にいても、職場にいても、さらには国外にいても、常に恐怖と不安にさらされています。家族や子ど

もたちも同様に強い恐怖を感じています。同時に、テレビではドローン攻撃による破壊の様子が生中継され、さらに恐怖を増幅させています。

夜はほとんど眠ることができず、睡眠も不規則になっています。子どもたちも生活リズムが乱れ、学校に通うことができず、学習の遅れが生じています。一部の授業はオンラインに移行していますが、子どもたちはうまく適応できていません。この状況は、私たち大人にとっても、子ども

たちにとっても大きな負担となっています。休暇中であっても自由に外出することができず、ほとんどの時間を家の中で過ごしています。本来であれば、クルディスタン地域では春は外出やピクニック、旅行を楽しむ季節ですが、週末でさえ外に出ることができません。

さらに、食料や燃料といった生活必需品の価格が大幅に上昇しています。例えば、ガスボンベ1本は以前は8,500イラク・ディナールでしたが、現在は40,000ディナールにまで上がっています。同様に食用油1缶も28,000ディナールから41,000ディナールに値上がりしています。

バルザン・エッザディーン（アルビル事務所）

5歳の娘ルヤは、爆発音を聞くたびに私にこう尋ねます。「パパ…火が来るの？」2歳8カ月の息子シャーは爆発の音を真似します。

私は本来学ぶ必要のないことを子どもたちに教えました。「もし大きな爆発音が聞こえた時はすぐに走ってダイニングテーブルの下に隠れるように」と。私たちは、自分たちのものではない戦争の中で生きていて、その炎は私たちの家にまで届いているのです。

昨夜、ドローンによる攻撃で、地元の治安部隊アサイシュの隊員が1人死亡しました。人々は恐れています。誰もが、次に何が起こるのかを不安に思っています。

4月13日現在、私たちは非常に強い恐怖を感じています。というのも、トランプ大統領がイランに今後48時間以内にホルムズ海峡を開放しなければ「地獄の門を開く」と警告したためです。また、これがアメリカとイスラエルによるイランへの核兵器使用を意味する可能性があるという報道も一部出ています。



ラワン(左から2番目)と家族

私が最も恐れているのは子どもたちのことです。こうした攻撃によって、彼らに何か起きてしまうのではないかということです。毎晩、私は家にシェルターを作ることを考えています。学校は閉鎖され、食料品の価格は上がり続けています。



バルザン(左)と家族

私たちが望んでいるのは、ただ平和だけです。この戦争が一日も早く終わることを願っています。

イマーン・サラハ・ハサン（バスラ事務所）

2026年2月28日、イランに近いバスラ地域でも戦闘が勃発しました。バスラの治安情勢は不安定で戦争開始当初、1週間にわたり業務ができなくなってしまいました。夜になると、イラン・クウェート両陣営の砲撃が絶え間なく行われています。私の住む地域はクウェートに近いため、アメリカ系石油会社への砲撃の音が聞こえます。日中に砲撃音が聞こえると、学生は下校させられ、2日間の公式休日が宣言されたこともありました。

私の業務は不規則な状態が続いています。こうした状況は病院や患者に悪影響を及ぼしていて、バスラ市外からの多くの患者は、情勢への不安や、突然かつ継続的な休校・休業の発表により、治療を継続できていません。

最も影響を受けているのは、イラン国境とクウェート国境の地域です。市内中心部では警備体制が強化されており、一部の検問所は撤去されましたが、まだ続いています。生活状況も厳しいです。食料価格は急騰しています。

戦闘が終結し、一日も早く安定した生活に戻れることを願っています。



イマーンと
院内学級の子どもたち



写真(右)のバニンちゃんが
描いた絵



子どもたちの声

治療で学校に通えない子どもたちの勉強のためのウィンターコース開講中に始まったイラン攻撃。現在、院内学級は中止しています。家で過ごす子どもたちから届いた声をお伝えいたします。



ぼくはここでは難民だから、院内学級がお休みになり、毎日が長くて空虚に感じられます。ほぼ毎日、空を飛ぶドローンの音が聞こえ、時々ミサイルの大きな爆発音が聞こえます。その音を聞くと、心臓がドキドキ始めます。もしあのドローンの一つがぼくたちの家に当たったら？もし爆発で家の壁が壊れたりしたら？

この前、近所の家にドローンが落ちてから、恐怖が前よりもっと現実的なものになりました。でも、誰かに「怖い？」と聞かれても、「ううん…大したことじゃないよ」と答えます。ぼくが怖がっているのを見せたくないの、強がって言います。でも、心の中ではものすごく不安なんです。

ぼくは心から院内学級の再開を願っています。院内学級では、友達に囲まれ、新しいことを学び、笑い、楽しい時間を過ごしていました。今は家にいて、日々が長く、先が見えないように感じます。友だちや先生たち、そしてあの安心感が恋しいです。フセイン（14歳）

ドローンの大きなブーンという音がいつまでも止まらないような気がして、怖くて心臓がドキドキします。ドローンのことを忘れようと、絵を描いています。戦争や恐怖に怯えることなく、走り回ったり、遊んだり、笑ったりできる世界を想像するために。

絵を描くと少し安心できますが、院内学級が恋しくてたまらないので、胸には重い悲しみが残っています。新しいことを学び、友達と遊び、先生の話聞くのが大好きでした。教室の光景、笑い声が懐かしいです。今は家にいるだけで、不安で落ち着きません。戦争が終わり、早く勉強できる日を夢見ています。夜も安らかに眠り、ラマダン（断食月）を幸せに過ごしたい。子どもらしくいられる場所に、私は属しているのだとまた感じたいです。グル（8歳）



ぼくは再び自分の国で起こっていることについて本当に悲しく感じています。僕たちは戦争に関わりたくありません。ドローンがぼくたちの生活をゆっくりと、恐ろしいものにしています。

ぼくたちは本来楽しむべき日々を楽しむことができません。特に今はラマダン（断食月）の期間で、本来ならば幸せで祝福された時期です。今ではすべてが変わってしまいました。家にいなければならず、安全に外出することもできません。家族は常にぼくたちのことを心配しています。

早く勉強して学びたいですし、院内学級の友達と遊んで笑いたいです。あの幸せで安全な日々を恋しく思っていますし、いつの日か自由に過ごせるようになることを望んでいます。ダニヤール（14歳）



1日中何をしていいかわからないことが多いですが、大好きな生まれたばかりの弟と一緒にいると、退屈でも幸せな気持ちになります。

僕の家は空港の近くにあり、いつもドローンの音が聞こえます。時々、爆弾を落とすドローンを自分の目で見ます。それはとても怖いです。そんな時は、窓が割れるかもしれないので窓から離れ、弟が危なくないように抱きしめます。

スマホのゲームで少しは気がまぎれますが、院内学級に行けず、友達に会いたいです。僕は勇気を出して、心配しないように自分に言い聞かせます。院内学級に戻り、友達と笑い、再び自由な気持ちになりたいです。それまで弟の世話をしながら、家で小さな幸せを見つけるように日々を過ごします。

ムスタファ（12歳）



戦争のせいで、気持ちが落ち着きません。私たちはこの戦争で何もしていないのに、それでも院内学級は閉鎖されたまま、友達にも会えません。先生たちと一緒に大好きな手芸をしたいです。

私は家で本を読んだり、映画を見たりして過ごしています。イード（ラマダン後の祝祭）のためにバザールへ服を買いに行きたかったのですが、もしドローンやミサイルがバザールを直撃したらどうしようと思うと、怖くて行けません！

また、毎晩モスクに行ってラマダンのお祈りをしたかったのですが、今は行けません。イードやナウロズ（新年の祭り）が始まる前に、戦争が一日も早く終わってほしい。野原を走り回り、ピクニックをして、クルドの民族衣装を着たい。自由で安全で幸せだったあの頃が恋しい。

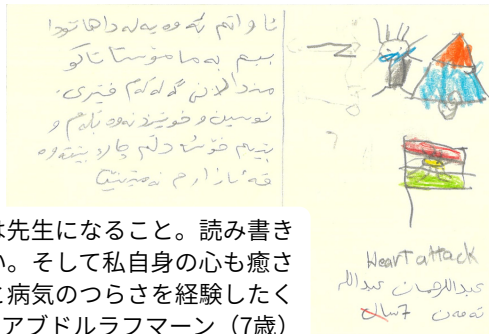
ロニヤ（16歳）



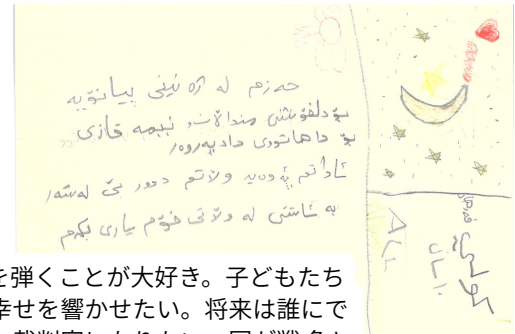
わたしたちの夢



毎年JIM-NETがイラク戦争開戦の3月20日に合わせて開催するギャラリー展では、現地の子どもたちに夢を書いてもらったカードを展示しています。今年は、戦争が子どもたちの心に影を落としている様子が伝わってくる内容が多くありました。



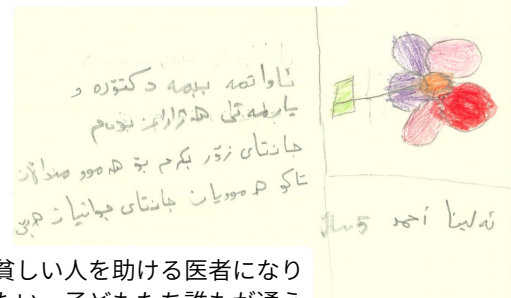
将来の夢は先生になること。読み書きを教えたい。そして私自身の心も癒され、二度と病気のつらさを経験したくないです。アブドルラフマーン (7歳)



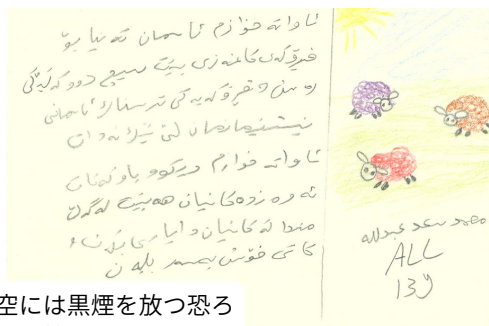
ピアノを弾くことが大好き。子どもたちの心に幸せを響かせたい。将来は誰にでも公平な裁判官になりたい。国が戦争とは距離を取り、平和への想いでいっぱいであってほしい。クーリー (10歳)



いつか世界の子どもたちを元気にできる医者になりたい。私たちの地球を破壊する戦車は見たくない。美しいものを見たい。平和な世界を願っています。メラ・マクサス (6歳)



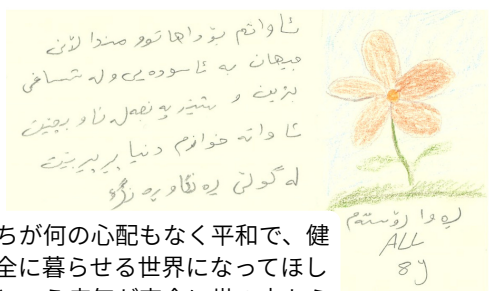
貧しい人を助ける医者になりたい。子どもたち誰もが通えるきれいな学校を作りたい。アリーナ・アハメド (5歳)



見上げる空には黒煙を放つ恐ろしい姿の戦闘機ではなく、紙飛行機が飛んでほしい。家族が子どもたちと過ごす大切な時間を十分に持てる世の中になりますように。ムハンマド (13歳)



祖国が戦争と占領から自由でありますように。大人が戦争について話す様子で不安になります。いつも美しい花々と蝶でいっぱいの世界であってほしい。シドラ (7歳)



子どもたちが何の心配もなく平和で、健康で、安全に暮らせる世界になってほしい。がんという病気が完全に世の中からなくなしてほしい。世界が美しい花で満たされているといいな。ラフ (8歳)



クルド自治区西部の人々の自由を願っています。医者になって、誰も痛みと苦痛と共に生きなくてすむようにしたい。アフマド (7歳)